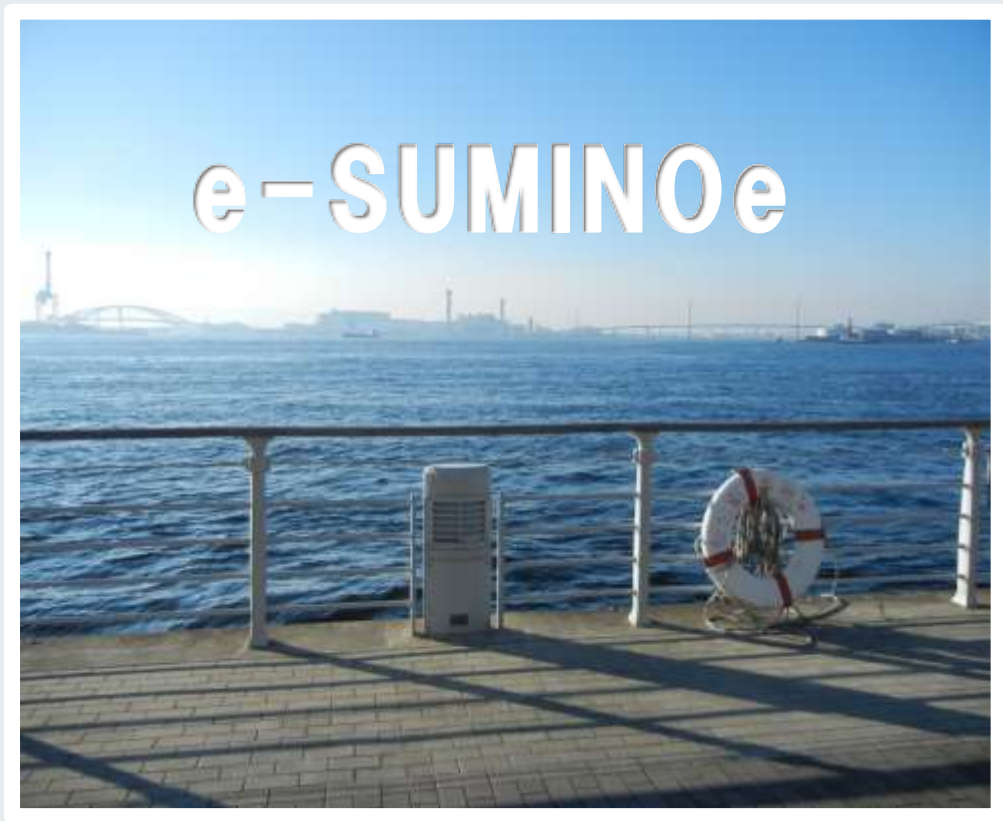


案

# 住之江区 将来ビジョン



平成28年 月 住之江区役所

# 「住之江区将来ビジョン」策定にあたって



日本は、世界に例のないスピードで高齢化が進み、また少子化に伴う人口減少の社会に直面しています。住之江区においても、その状況は変わりません。その中で私たちは未来を見据え、将来の新たな課題解決のためにしっかり対応していかなければなりません。

「住之江区将来ビジョン」は、おおむね5年後の住之江区の目指すべき姿について、ポイントを絞りまとめたものです。高齢者にとっても現役世代にとっても、そしてこれからの社会を担っていく子どもたちのためにも、住之江区で生活し、働き、そして学んでよかったといわれるまちにしていきたいと考えています。そして、将来目指すべき姿の実現のためには、区民の皆様にご協力をいただくことは不可欠であると考えています。

「住之江区将来ビジョン」をぜひご一読いただき、住之江区の将来の姿に思いを馳せ、その思いをそれぞれのお立場で行動に変えていただき、区民の皆様、民間事業者、地域の様々な団体、そして行政が協働して、

“夢と希望を持って幸せに暮らすまち **e-SUMINOe**”

の実現を推し進めてまいりたいと思います。

住之江区長 西原 昇

## 目 次

I	住之江区について	2
1	住之江区の名前の由来	3
2	人口の動向	3
3	住之江区の歴史	4
II	将来像と施策の方向	6
1	将来ビジョンについて	7
2	めざす将来像	8
3	施策の方向	9
III	施策推進のために	26
IV	重点プロジェクト（別冊）	

# I 住之江区について

- 1 住之江区の名前の由来
- 2 人口の動向
- 3 住之江区の歴史

# 1 住之江区の名前の由来

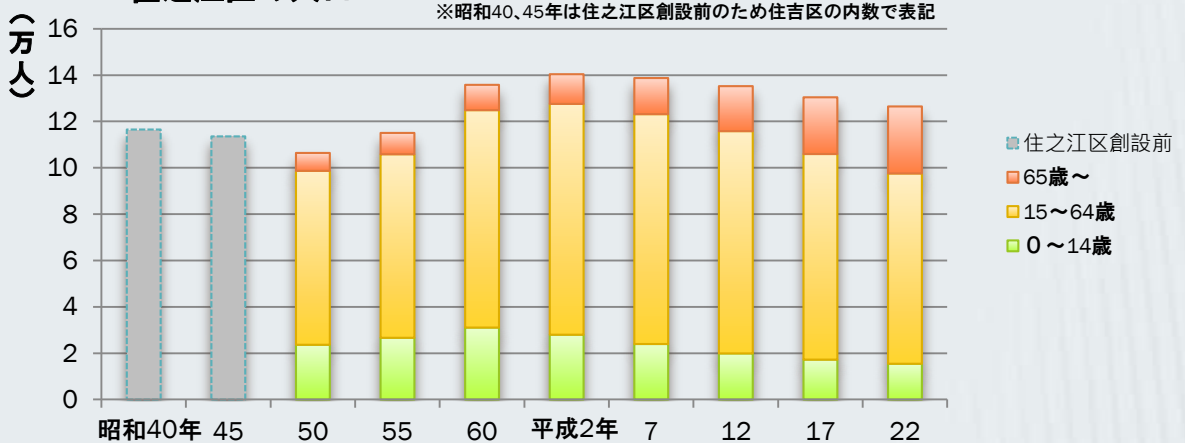
住之江は『古事記』『日本書紀』『撰津国風土記』には墨江、住吉、須美之叡などと記され、いずれも「すみのえ」と読んでいました。古来、歌の名所としても知られ、『万葉集』においても、住吉、墨吉、墨江、清江、須美乃江、須美乃延と書いた歌が多数見られます。また、「すみのえ」の由来については、現存はしていませんが、撰津国風土記での記述が他の文献で引用されています。そこでは、じんぐうこうごう神功皇后の世に出現した住吉大神が住むところを探しているときに、これぞ住むべき国（すみのえのおおかみ真住吉住吉国）であると称賛し、後にこれを略して須美乃叡と言うようになったとしています。

中世以降に「すみのえ」が「すみよし」に転訛したとも言われていますが、かつて住みよい国、住むべき国と称えられた場所が「すみのえ」であり、今日の住之江区には「住みよい区」の意味が込められているのです。

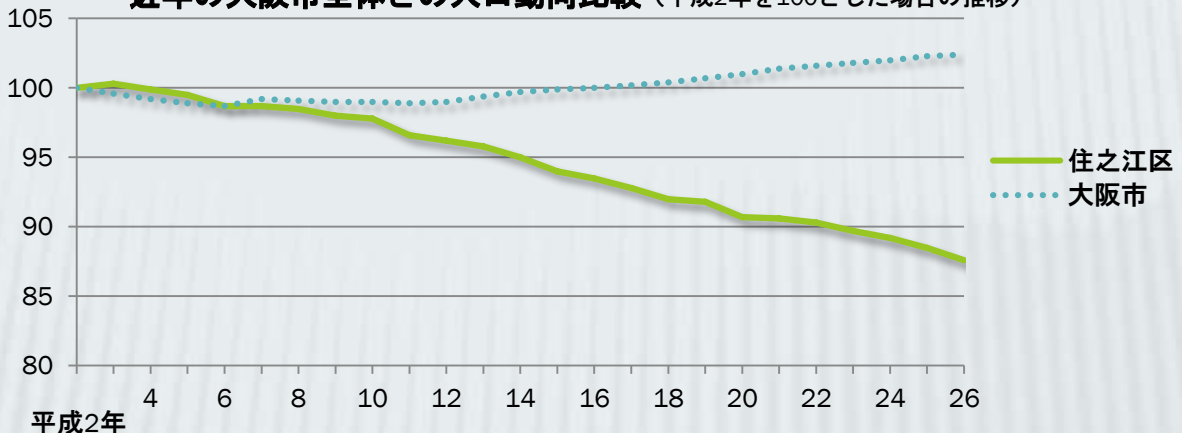
# 2 人口の動向

住之江区の人口は、国勢調査では平成2年をピーク（推計人口では平成元年）に減少を続けています。また、少子高齢化が急速に進んでいる状態にあります。人口は、まちの活力を示すバロメーターでもあります。こうした人口減少に歯止めをかけ、特に年少人口（0～14歳）、生産年齢人口（15～64歳）が増加に転じていくよう、まちの魅力を高めていくことが、住之江区の重要課題となっています。

住之江区の人口



近年の大阪市全体との人口動向比較（平成2年を100とした場合の推移）



### 3 住之江区の歴史

まちづくりを考えると、まちの歴史や成り立ちを理解し、それぞれの地域の特性を十分に踏まえておくことが重要です。ここでは、住之江区の歴史について、簡単に振り返ってみます。

#### <古代～中世>

住之江は、「1 住之江区の名前の由来」でも述べたように、古くから登場する地名であり、古代以来の長い歴史を持っています。また、古代には、現在の区域の大半は海であり、上町台地の西端を走る阪堺電気軌道阪堺線あたりが海岸線となっていました。そして、台地のくぼ地を流れる細江川の川下にできた入り江に、墨江津すみのえのつという港が整備され、北の難波津なにわのつとともに大陸と我が国とを結ぶ国際交流の要衝となっていました。

時代が進むにつれ、土砂の堆積や砂州の成長などにより、海岸線は次第に西に移動していきました。鎌倉時代末期にわが国最初の灯台として建てられたと言われている高燈籠の場所は、今の十三間堀川沿いにあたります。また、こうした陸地化は、新たな町の発達をもたらしました。室町時代末期には、熊野街道に代わる幹線道路として大阪の低地を通る紀州街道が開かれ、これに沿って安立、粉浜などが街道筋として発達していきました。

#### <近世>

江戸時代に入ると、住之江の地勢に大きな影響を与えた大事業が敢行されます。大和川の付替えです。かつての大和川は河内平野で北流し、大阪城の北で淀川に合流していました。流路は屈折が多く、大阪市中にも度々、脅威を与えていたことから、宝永元年（1704年）に幕府によって、現在の川筋に付替えが行われました。この新川の整備により、多くのつぶれ地が発生しましたが、その一方で、海と内陸部とを結ぶ水運が開かれていきます。また、新川の土砂が堆積し、堺港は次第に衰退しますが、反面、浅瀬を農地へと開発する新田開発が進められていくこととなります。

最初の新田開発は北島新田で、多田屋徳右衛門と油屋角兵衛によって、次いで加賀屋新田が加賀屋甚平衛により着手されました。その後、桜井新田、村上新田、庄左衛門新田、嬰木新田みどりき、柴谷新田などが次々に開発され、明治の初めころには、現在の平林付近まで土地が広がっていました。

#### <近代～戦前・戦中>

江戸時代は、住之江区の大半は摂津国住吉郡に属していましたが、明治に入ると大阪府住吉郡となり、明治29年には東成郡となりました。当時は大半が農地で、粉浜村、安立町、墨江村、敷津村の4町村が存在していました。大正14年には、大阪市の第2次市域拡張が行われ、区域の大半は大阪市住吉区となりました。



昭和初期の高燈籠

また、明治以降の近代国家づくりの中で、鉄道網が急速に整備されるとともに、第1次世界大戦をきっかけとした造船ブームにより、木津川沿いに大小の造船所が相次いで建設されました。さらに、大阪経済の発展に伴って築港の修築が必要となっていく中、当時、大正区船町にあった木津川飛行場を移転させ、大和川尻に国際空港を建設するという計画が持ち上がり、これがきっかけとなって、南港の埋め立て事業が始まりました。その後、戦時体制となったため、国際空港計画は中止となり、工事をほとんど中断したまま終戦を迎えることとなりました。

### <戦後～現在>

戦後は、戦災復興関連の事業が市内全域で進められていく中、昭和22年策定の大阪港復興計画において、大正の内港化を進めるため、大正区内の木材団地を平林に移転させるという構想が打ち出されました。事業は昭和23年に港湾局が着手、昭和24年からは土地区画整理事業で行われることとなり、約69万㎡の貯木場が整備され、昭和46年に木材業者の移転がすべて完了しました。

また、埋め立てが中断したままであった南港は、重化学工業の拠点として、昭和33年に埋め立てが再開されました。昭和34年には、大手石油会社が南港への進出を表明し、工事に一層のはずみがつくこととなりますが、その後の状況変化から、昭和39年に石油会社から大阪市に対して、契約解除の申し入れがあり、撤退が決定しました。

石油会社撤退後は、昭和42年に承認された「大阪港整備第2次改定計画」において、新しい港湾都市づくり構想が打ち出されました。この計画は、大阪商港の拡充基地として近代施設と流通機構を整備するというものであり、今日の南港ポートタウンもこの計画に位置づけられています。また、南港の北側では、その後コスモスクエア2期地区として、埋立拡張が行われ、平成7年に埋め立てが竣工し、今日に至っています。



昭和63年の住之江まつり

このようなまちづくりの過程で、大阪市では、昭和35年頃から人口が都心部で減少し、周辺部で増加するというドーナツ化現象が始まり、現在の住之江区を含む当時の住吉区が、東区(当時)の人口の8倍にも達するという状況が生まれました。

このため、行政事務にも深刻な影響を及ぼすようになり、昭和49年、大阪市は住吉、東住吉、城東、東淀川の4区の分区を実施するに至りました。私たちの住之江区は、この時の住吉区の分区によって誕生しました。

以上のように、古代には「住みよい国」などと称えられた住之江区は、その長い歴史の中で、それぞれの時代の要請を受け、公民が役割を分担し、互いに協力しながらつくりあげてきたまちであると言えます。また、海に向かって土地を拡張してきた結果、現在では、大阪24区の中で最も面積が広い区となり、区内各所には、古代から現代に至るまでの歴史を反映した、有形無形の資産が存在しています。

今後のまちづくりでは、こうした住之江区のまちの特性を十分に生かし、まちの将来を見据えながら、区民の皆さんとともに取り組みを進めていきます。